

# 記憶の「生々しさ」について

— 沖縄戦を想起するふたつの方法 —

磯田 和 秀

## — はじめに

アンダーソンは、ナショナリズムの記憶と忘却に関する有名な論考で、ルナンが『国民とは何か』（一九九七・四一・六四）で言及した、国民の創造における「忘却の必要性」を主張した箇所を取り上げる（アンダーソン一九九七・三二六―三二八）。ルナンは、「国民の本質とは、すべての個々の国民が多くのことを共有しており、そしてまた、多くのことをおたがいすつかり忘れてしまっているということがある」とし、「フランス市民はすべてサン・バルテルミー、一三世紀の南フランスの虐殺を忘れ去っていなければならぬ」と主張していた。

しかしアンダーソンは、ルナンのこの言葉にパラドクスを見い出す。つまり、ルナンは「サン・バルテルミー」や「一三世紀の南フランスの虐殺」について、それらがどんな

事件であるかを読者に説明する必要をまったく感じておらず、読者は、当然に記憶していることを「すでに忘れ去ってしまったていなければならぬ」と命じられている。そのパラドクスからアンダーソンは、「国民になるには、ルナンが言うように、それらの出来事を単に忘却するのではなく、それを記憶／忘却しなければならないと言う。

国民が忘れなくてはならないのはたとえば、「一三世紀の南フランスの虐殺」において、異端として殺されたアルビジョワ派（カタリ派）の人々の多くがプロヴァンス語あるいはカタロニア語を話したこと、殺した側の人々が西ヨーロッパの各地からきていたことである。それは「国民どうし」の争いではなかった。そして、記憶しなければならぬのは、「南フランスの虐殺」という言葉の効果によつて「ほかならぬフランス人同胞のあいだの安心できる兄弟殺しの戦争」であったことだった。この記憶／忘却の技法による

「歴史の解釈のシステマティックなキャンペーン」によつて、「すべての若きフランス人女性とフランス人男性はいまや『家族の歴史』と刻まれた一連の古えの殺戮を『思い起こさせられる』のである」。

国家——とりわけ国家の教育機関——が主導するこうした記憶と忘却の特徴は、「国民どうし」の殺しあいそのものを、忘れさせようとするのではなく、「兄弟殺し」として記憶させる点にある。すると、アンダーソンがこの分析の直後、括弧内で付け加えたことは、どう理解できるだろうか。アンダーソンは、「ルナンがすべてのフランス市民はパリ・コミューンを『すでに忘れ去つてしまつて』いなければならぬと言わないことにも注目しておこう。この記憶は一八八二年にはなお神話的というよりは現実的なものであり、これを『安心できる兄弟殺し』の合いことばでくくるにはまだ生々しすぎた」と述べている(アンダーソン一九九七・三二八)。一八七一年の「パリ・コミューン」における虐殺事件はまさに「国民どうし」の殺しあいであり、「兄弟殺し」として想起するのにふさわしい事件であるはずではないだろうか。しかし、アンダーソンによれば、その記憶の「生々しさ」のために、「国民」が存在しなかった時代の「サン・バルテルミー」や「一三世紀の南フランスの虐殺」を「兄弟殺し」として再構成することに何の矛盾も感じないルナ

ンが、実際「国民どうし」で殺しあつた「パリ・コミューン」を「兄弟殺し」として記憶するのにためらうのである。これだけを取り上げれば、「パリ・コミューン」は「神話的事件というよりは現実的なもの」であり、わずか一年前の事件なので、近いものを殺された人々が、殺した側を「同じ国民」と認めない、と主張しているように取れなくもない。たしかに一年前の事件と数百年前の事件とでは、思い出したときの「生々しさ」には相対的な差があるだろうことは経験的に判断できる。近い人の死のほうが縁遠い人の死よりも生々しく感じられるのは、説明抜きに理解できることなのかもしれない。しかし「共同体は、その真偽によつてではなく、それが想像されるスタイルによつて区別される」(アンダーソン一九九七・二五)とするアンダーソンの主張からすれば、この「生々しさ」は単に個人の生理的感覚の問題ではなく、ナショナリズムが描こうとする「国民史」に関わる問題だといえる。

つまり、ナショナリズムが記憶と忘却の技法を駆使しても、取りのぞくことのできない「生々しさ」がある、ということだ。ネイションが命じたからといって、個々の人間の記憶はそのとおりにならない。それ自体はあたりまえのことだが、ネイションの命令通りにならない個人の記憶という構図を立ててしまうと、それぞれの歴史の語り口が

## 記憶の「生々しさ」について（磯田）

ナシヨナリスティックかそうでないかを判断することで終わってしまふ。考えなくてはならないのは、それぞれの歴史の記述が「国民史」であるかないかではなく、「国民史」にならない記憶の「生々しさ」とはどんな想像力の結果なのかということである。

ルナンが、論理的にはネイションの同一性に回収され得る事件であるのに、「パリ・コミューン」を忘れようとも、記憶しようとも言わないのは、（記憶の担い手ではなく）記憶そのものの論理が、ネイションの同一性をゆるがさないではおかぬからではないだろうか。「生々しさ」とは、記憶と忘却の技法の埒外にある、といつてもいいだろう。そのために、想起された瞬間、それは当事者の思惑とは別に動きはじめるのである。本稿で試みるのは、このような「兄弟殺し」に安心を与えない、記憶自体の論理としての「生々しさ」とはなにかを、沖繩戦の記憶の想起を事例として検討することである。

## 二 ネイションのパラドクス

国民国家の歴史的意義は、宗教的ヒエラルキーや貴族による封建支配を脱して、自立した個人による共同体を主張したことにある。自立した個人であるために、人々は自分

の由来——種族、言語、宗教——を一度は忘れ、均質で空虚なカテゴリーたるネイションの住人でなくてはならなかった（ルナン一九九七とくに五一―六四を参照）。

しかし小田も指摘するように、「誰もそのような無歴史的で空虚なカテゴリーを自分たちの集団として愛着を感じたり、それを防衛しようと思うことはなかったのである。ナシヨナリズムは、まず、いったん『忘却』によつて創られたネイションを、今度は『忘却』としてではなく、『記憶』の共有によつて規定し直す必要があった。いいかえれば、空虚なカテゴリーに過去からの連続性という内実を与えるために、中核となるエスニック集団の連続性という基盤を創出し、ネイションの歴史としての『国民史』や『国民的伝統』を発明しなければならなかった」（小田一九九九…一三〇）。

ネイションの歴史の創出は、しかし、慎重かつ巧妙に（そして強硬に）なされなくてはならない。なぜなら、「そのような『記憶』の創造は、下手をすれば、個を具体的な出来事の記憶や、歴史の特異性が生きているローカルな場に戻し、さまざまな相互関係の網の目に再び繋ぎ止めてしまう恐れがある」（小田一九九九…一三〇）からである。均質であるために空虚にすることと、愛着を持たせるために内実を与えることという、二つの方向をナシヨナリズムは志向

しなくてはならない。空虚にすれば誰もネイションに愛着を持たず、内実を与えれば忘れたはずの「ローカルな場」を再び思い出してしまいかねない。このことをひとまずネイションのパラドクスと呼んでおこう。

このパラドクスを引き起こす「ローカルな場」では、「親族関係や主従関係といった諸関係の原理である隣接性による『換喻』的想像と、その延長線の不明瞭な広がりによる『隠喻』的想像（小田一九九七・八五七）とがはたらく。ナショナリズムに特有な「提喻」的想像とは原理的にそぐわない想像が、そこでなされるのである。

提喻的なアイデンティティは、つねにある全体を想定し、個々の要素をその部分とすることで成り立つ。逆にいえば、個は全体の部分として位置付けられることで意味を獲得する。さらにひとつの全体は別の全体とは決して重ならない。重なるかに見える部分は新たに別の全体として設定される。部分はさらに細分化された部分の全体として想定される。集団の範囲がどのように拡大／縮小されようとも、部分と全体の関係は変わらない。

これに対して「ローカルな場」では「個としての自己は、男／女、同世代／隔世代、親族／姻族、主／従、目上／目下といった二項対立群による錯綜した諸関係の束として規

定されている」（小田一九九六・一一二）。AでありかつB、BでありかつC……というふうに、全体を構成することなく、個人を別の個人に結び付ける。そして、それを集団として限定する境界線を引くときには、「要素と要素、あるいは要素間の関係と関係を類似性で結び付ける『隠喻』（小田一九九六・一一六―一一七）が作用する。そして『換喻的関係の連鎖（の想像）による網の目をそのつどの隠喻的關係によってちぐはぐに限定』（小田一九九六・一一七）する集団という、提喻的想像力では理解できない事態が出現するのである。近代に特有な種的同一性よりも普遍的とされる「構造的同一性」（小田一九九六・一一七）である。

原理的に異なる想像のスタイルでありながら、ネイションのパラドクスが起こるのはなぜなのか。ナショナリズムが提喻的想像を押し付けるところで、民衆の実感としての換喻的想像と隠喻的想像が抵抗する、という現実の権力闘争の図式によって説明することも可能だろうが、ここではもうすこしレトリック論での説明を続けてみたい。

佐藤信夫によれば、提喻と換喻の区別はしばしば無効とされ、提喻は換喻の一種であるとされたり、逆に換喻は提喻に還元されると主張されたりもした（佐藤一九九二・一七四―一八〇）。定義上、提喻は全体と部分の関係による転義であり、換喻は隣接関係による転義だが、たとえばひげ

記憶の「生々しさ」について（磯田）

と人物との関係は全体と部分なのか隣接なのか、ワインとピンは、ペンと書物は、町と個々の建物や住民はというように、いくらでも曖昧な事例を挙げることができる。それは「《全体》と《部分》」ということばの正体を、レトリックの理論家たちはほとんど例外なく、混乱したまじまじのみにしていた（佐藤一九九二・一八四）ためである。そこで佐藤はグループμによる「《全体》と《部分》」のふたつの異なった理解の仕方を参照する。それは、「人間」という《全体》を頭、首、腕、手、胸、腰、足……という《部分》の集合であるとした場合と、「人間」という《全体》を日本人、ヨーロッパ人、アメリカ人……という《部分》の集合とした場合である。そして（グループμは両者を提喻としたのだ）佐藤は後者の「提喻」こそ提喻と呼べるものであり、前者の「提喻」は実は換喻であると述べる。なぜなら、前者は現実の構造における全体と部分であり、物理的な大小の関係はあっても、概念上の大小の関係はない。つまり《全体》と《部分》の関係にあるようにみえながら、実際には現実の隣接性によって関係づけられているため、これまで換喻とされてきたものと同じ原理によって成り立っているのである。それに対して後者における全体と部分は、概念上の大小によっている。それこそが、換喻ではない提喻として独立した転義の形式として認められるべきものなので

ある（佐藤一九九二・一八九―一九〇）。

佐藤のあざやかな議論を逆戻ししようだが、同じ言葉に対して、物理的な大小（＝現実の隣接性）と概念的な大小という、別々の原理にもとづく想像が可能であることが、ネイションのパラドクスを引き起こすのである。過去の出来事は、ネイションの歴史の「部分」として意味上の「全体」へと結び付けられるが、その「部分」は現実の隣接性によって、「全体」とは無縁な別の出来事と結び付くこともできる。だからこそ、空虚なネイションに愛着を持たせるために与えた内実が、忘れたはずの「ローカルな場」を思い出させるかもしれないのである。

そうした内実のひとつである日の丸旗とそれに結び付いたさまざまな出来事との関係は、提喻的想像力において、ネイションに対する個人の帰属関係に置き換えられる。公的な儀礼において「日の丸」を掲げるのはネイションへの帰属を意味し、それに反対するのはネイションの構成員としての資格に欠けていることを意味する、ということになる。しかし、米軍による支配を嫌って「日の丸」を掲げていた沖縄の人々は、単純に「祖国への復帰」を願っていたというよりも、農地の軍用地への接収や、兵士による犯罪や、昼夜を問わず聞こえてくる軍用機の爆音といった、生活上の問題の解決を「祖国復帰」に求めていた。

たとえば「祖国復帰」以前に「日の丸」を振っていた高校生が、二〇数年後「日の丸」をポールからひきおろして焼くことになったのは、かつて「日の丸」に対して示した忠誠心を忘れたからではない。そもそも彼「知花昌一」にとって、「日の丸」は国家に対する忠誠心の問題ではなく生活上の問題であつたのだ（知花一九八八）。だから、焼きすてたあと、ふたたび「日の丸」を大事にしまつていることも、知花にとつては不自然なことではない——彼はいう「日の丸は私の青春だつた」（金城実一九九六・一五八）。ここでいう生活上の問題とは、たんに生活の必要ということだけを意味するのではなく、生活の具体的な場における「日の丸」をめぐるさまざまな関係性を指している。そうした「ローカルな場」における「日の丸」は、国家への帰属という一元的な価値のもとで語られるのではない。「日の丸」は日本について語る教師や隣人や家族、近所にある基地や、時々空から降りてくるパラシュート部隊や、米軍の基地つまり沖縄がふたたび戦場になるかもしれないという不安などと直接結び付く。しかし、穏健であらうと過激であらうと、ナシヨナリストはそうした「ローカルな場」から「日の丸」を引き離して、直接ネイションという全体に結び付けようとする。

史苑（第六一卷二号）

おなじように、過去の出来事は、現実の隣接性によつて

想起されるか、概念的な大小によつて想起されるかによつて、「国民史」が求めるような「過去からの連続性」の証拠になつたり、あるいは断片どうしの不安定なネットワークを形成したりする。ネイションがネイションであるためには、個々の要素を全体化されたネイションに結び付けなくてはならないが、それは意味上の「全体」と「部分」の関係によらなければならない。「ローカルな場」における現実の隣接性は排除されなくてはならない。回り道をしたが、ここでもうやく、排除される記憶の「生々しさ」とは換喻的な想像力によつて得るもの——現実の隣接性——ではないかという見通しを得ることができたのではないか。

ただし、ここで言う現実の隣接性とは、個々の要素が「全体」を経由することでは別の要素と結び付かないのではなく、要素と要素が直接結び付く、そのような想像力の根柢を意味していることは、改めて強調しておきたい。現実の隣接性も概念上の大小も、ともに想像上の関係なのであって、どちらかがより「自然」な関係だとは言えない。繰り返せば、現実の隣接性とは複数の二項対立群が仲介する要素間の直接的な関係のことであり、概念上の「全体」によつて統合された「部分」どうしの関係とは、まったく異なる。生者が死者を自分と同じネイションの一員として想像するか、自己を中心としたさまざまな社会関係の網の目のなか

に死者を想像するかが問題になるのである。

### 三 生き延びる「兄弟殺し」

太平洋戦争末期に戦われた沖縄戦は、これまで多くの記録文学、証言集、小説、舞台劇、映画などのメディア、記念碑や記念日といった記念行為などにおいて語られ続けてきた。そこで中心となるのは、多数の住民を巻き込んだ沖縄戦の悲惨さ、なかでも味方だと信じていた日本軍によって、塹壕から砲火のなかへ追い出されたり、自決を強制されたり、スパイの嫌疑をかけられて殺されるなど、直接的・間接的に日本軍のために、多くの沖縄県民が命を落としたことである。こうした事実は、日本・アメリカ両軍の行動に焦点をあわせた戦闘記録において無視されたばかりでなく、新しい平和祈念資料館の展示計画においては隠蔽さえされようとした（屋嘉比二〇〇〇、新沖縄フォーラム編集運営会議一九九九参照）。不断に続けられる証言の収集や出版活動は、一面においてこうした記憶の抹殺に対する抵抗である。しかしそれらは、単純にある事実が消去されることに対してだけではなく、事実の伝えられ方によって、記憶でなく忘却が逆にうながされることに對しても異議をとなえている。

事実の伝えられ方は常に論争の対象になっている。本稿ではこれらの論争の細部に立ち入る余裕はないが、議論を進めるにあたって、互いに関連しあう以下の点を確認しておきたい。まず、沖縄戦の表象があふれていながらも、つねに何かが忘れられていることに對する抵抗が、沖縄戦を語り続ける動因のひとつになっていること。次に沖縄が日本と対立するものであると同時にその一部でもあるという二重性の視点が、しばしば語りの枠組みになっていること。そして想起の作業は常に現実の問題と関わっているということ。

日本兵による沖縄の住民の虐殺は、語られながらなお忘れられているという逆説の典型的な事例である。虐殺の記憶は、アメリカの植民地支配を脱して「祖国復帰」を果たす過程において語られたのだが、このことは日本兵の行為が単純に日本への敵対心に結び付かないことを示している。富山一郎（一九九五）は沖縄が日本の領土に「復帰」した一九七二年に出版された証言集（沖縄県労働組合協議会編『日本軍を告発する』一九七二）を分析して、日本兵による沖縄の住民の虐殺が「いくつかの語りの秩序」にしたがっていることを、次のように指摘している。

注目すべきは、虐殺事件がまさしくルナンのいう「同胞

殺し」として思い起こされているという点である。日本兵への恨みが「同胞殺し」のなかに閉じられれば閉じられるほど、祖国のために死んだという記憶が刻印されていくのである。虐殺の記憶に共通しているのは、この「同胞殺し」に他ならない。(中略) 新川明が「祖国復帰」を『基地つきか基地撤去か』ということだけに沖縄問題を矮小化して『よりよき返還』を競い合うナショナリズムの競合」だとするのは正鵠を射ている。しかし、さらにつけ加えるべきは、このナショナリズムが「祖国のために死ぬ」という死の共同体であつたという点であろう。(富山一九九五・一二六)

「祖国復帰」という現実の政治過程のなかで虐殺事件が「兄弟殺し」として語られるときに忘れられているのは、日本兵は沖縄の人々を「兄弟」としてではなく、「スパイ」として、もっと端的にいえば「敵」として殺したことである。ルナンが「フランス国民」の存在しない時代にまでさかのぼって「兄弟殺し」を作り上げたことを思い出そう。「兄弟殺し」の記憶は、殺害の現場にあつた敵対関係を、なかつたことにするのである。より正確にいえば、沖縄の人々が日本の「敵」として殺されたことが、日本兵の残虐行為の記憶Ⅱ「兄弟殺し」の語りに置き換えられ、忘れさせられる。思い出しても安心だから「兄弟殺し」として想起され

るのではなく、「兄弟殺し」として想起されるから安心なので。

さらに富山によれば、こうした二重性のために放置された記憶がある。それは、「敵(スパイ)Ⅱ他者として殺された死者たちさえも『同胞』として分類し、その死を『我々自身のもの』として記憶し、また忘れていくプロセス」において、「こうした人種分類に分類されない、不確かな証言の領域」(富山一九九五・一二七)である。富山は前掲の証言集から「スパイ」虐殺場面の目撃者の語りを引用している。『われわれ日本人が琉球土人のために犬死にする必要があるのか』大きな声だった／口には出さなかったが、八日本人は鬼だ／自分が日本人であることも忘れて、わたしはそう思った(富山一九九五・一二七)。富山のいう「人種分類」は階層化された体系である。「人種分類」において「沖縄人」は「日本人」の下位カテゴリーであるため、「日本人であることも忘れ」た記憶は、「人種分類」のなかに位置を見い出すことができない。そのため『日本人であることを忘れ』た記憶は、政治主体にとっては語られない記憶として放置された(富山一九九五・一二八)。沖縄住民の虐殺を「兄弟殺し」として記憶することは、完全に味方にもなれないことになるのである。



記憶の「生々しさ」について（磯田）

たとえば作家の曾野綾子は、『ある神話の背景』（曾野一九八四）で、ひとりの日本軍大尉の命令によって三〇〇人以上の島民が「集団自決」<sup>③</sup>したとする、いわゆる「赤松神話」を解体し、「集団自決」の原因を沖縄と「本土」との連続性において想像するが、その結果は典型的な「兄弟殺し」の語りになっている。「あの時、—あの頃（太平洋戦争中…引用者）、日本人は今とは全く違った心情の中にいたことを、私も認めなければならない。（中略）私は一三歳の平凡な少女として、あの頃、自分が全く別の価値判断、情熱の種類の中に生きていたことを知っている」（曾野一九八四…二三二）と述べて、同時代人として沖縄戦の死者を想起しようとする。しかし曾野が想起する沖縄の死者は「日本人」以外の何者でもない。彼女にとって「沖縄人」も「本土人」も等しく日本国民であり、沖縄県民といえども、他の都道府県の人々と何ら変わりはない。曾野は、単純に「沖縄」を「本土」に従属させるのではなく、「本土」も「沖縄」もともに等しく「日本」の一部なのだと主張している。

実に、渡嘉敷のあらゆる問題は、日本軍、米軍共に、人間の死を恐れない、というところから始まっているのであって、それはいわば広範な意味での集団発狂そのものと一言してもいいかも知れない。そして改めてつけ加えれば、その

集団発狂の症状は、特に醒めていた少数の人を除いて、全日本のあらゆる人間を満遍（ママ）なく犯していたのである。渡嘉敷はその発火点であった。しかし油は既にまんまと満たされており、火さえつければ、日本中のどこでも、それは渡嘉敷と同じように燃え上がった筈であった。（曾野一九八四…三六三）

「燃え上がった筈」と実際「燃え上がった」こととの違いを、彼女は全く考慮しない。<sup>③</sup>インタビューを受けたひとり、金城重明は、曾野の分析において『集団自決』の元凶であった『皇民化教育』への徹底したメスが入れられていない（金城重明一九九五…一八〇）と指摘している。曾野は金城に対して「自分は作家だから思想には触れません」と言ったとされているが（金城重明一九九五…一八〇）、「集団自決」した死者にとつても、それを生き延びたものにとつても、「皇民化教育」は思想の問題ではなくて現実の問題であった。なぜなら、日本全国で行われた「皇民化教育」は、思想としては同じものでも、どのように生きられたかは同じではないからである。<sup>③</sup>

曾野は「皇民化教育」に一度も言及しなかったわけではない。沖縄県人が「自発的な意志」にもとづいて戦争に参加するにいたった経緯に触れた文章を読み、「本土からはる

かにはなれた、異質な歴史を持たされた人々が、現実生活においても、信じられぬ差別を受けて来た。沖縄県人は能力のある人間なのだ、ということを示すためには、彼らは死を代償にそれを示すはかなかった(曾野一九八四・三五九)と、感想を述べる。しかし曾野は、その程度の「自発的な意志」は日本全国にあった(曾野一九八四・三六〇)としている。そして、沖縄の教育者の問題に触れながらも(曾野一九八四・三六二)、沖縄における教育の実践と、「皇民化教育」の思想と、差別を受けてきた「二級市民」としての沖縄の人々の歴史に、曾野は関連を見い出さない。同時代を生きた、同じ日本人である彼女にとって、沖縄だけが特殊ではないからだ。とすれば、曾野にとって、日本兵の発した「琉球土人」という言葉は何を意味するのだろうか。米軍が沖縄ではなく東京に上陸したとして、「東京土人」と言われたと想像できるだろうか。曾野は、「あの頃」の日本人の「今とは全く違った心情」を記憶するために、沖縄県人にとってまさに「あの頃」存在した「本土」と「沖縄」の差を忘れてしまう。

差別と偏見の結果としての虐殺や「自決」を「兄弟殺し」と言いくるめられないような想起の仕方には、ふたつの方法が考えられる。ひとつは沖縄戦の死者を(日本人の一部としての沖縄県民の死者ではなく)沖縄人の死者として想

起することであり、もうひとつは沖縄戦を全人類の歴史にすることである。前者は日本人と対等のカテゴリーとしての沖縄人という「人種分類」に依拠して日本と沖縄の敵対関係を記憶し、後者はそうした「人種分類」を否定することで敵対関係を日本と沖縄のあいだに限定せず、ヒトとヒトが殺しあう全人類の不幸の代表例として沖縄戦を記憶する。

元コザ市長・大山朝常は、沖縄の日本との同一性なるものは、日本が自国の利益のために押し付けたまやかしであり、多くの沖縄人がそれにだまされていた、として次のように指摘する。

沖縄は日本ではない。沖縄人は日本人でない——日米双方が暗黙のうちに了解していたこの認識に対し、そこから最も目をそむけていたのがほかならぬ私たち沖縄人です。ひたすら日本を祖国と仰ぎ見て、日本人であろうとして耐えつづけたことが、逆に沖縄戦をはじめとする多くの悲劇を招いてきたのではないのでしょうか。(大山一九九七・一八二—一八三)

このように、「沖縄人」が「日本人」の下位カテゴリーでなく対等のカテゴリーであれば、「日本人であることも忘れ」

## 記憶の「生々しさ」について（磯田）

た記憶といったあいまいな形で沖繩戦を想起することはできない。スパイの嫌疑を受けて殺されたことや「集団自決」といった沖繩戦の悲劇は、琉球処分以来続く「日本人」の暴力の帰結であり、「沖繩人」はひたすらだまされ続けた無垢で無知な被害者である。味方でもあり敵でもあったという二重性の記憶は、過去の過ちとして放置される。沖繩戦で追い詰められた「日本人」は、嘘をついていたことを隠しきれなくなつて「沖繩人」を殺した、「沖繩人」は「日本人」の嘘に気付かず「集団自決」してしまつた、という語りが「人種分類」にきちんと収まる。自分たちの親族や姻族や友人や隣人を殺した日本軍に対する憎しみを、あるいは押し付けられた「皇民化」のために「自決」してしまつた恨みを、明確に表現することができる。

こうした本質主義の語りは、排他的なカテゴリーの内部にヘゲモニーを再生産するという、おきまりの過程をたどることになる（大山一九九七とくに一八三—一九五）。しかし、ここでそれ以上に重要なのは、「琉球土人」と罵られたことに対する「日本人であることも忘れ」た記憶が、忘れられるのではなく、間違いとして記憶されることである。「琉球土人」といわれたなら「日本人であることも忘れ」るのではなく、沖繩人であることを思い出すべきだったのだ。このように沖繩戦を想起することで、沖繩人が自らの内部

に作り上げた他者＝日本人を外部のものとする。より正確にいえば、全体化された「沖繩人」の内部に積極的に他者を見出し、操作の対象としたうえで外部に放逐する。しかし、沖繩人の内部の他者がそのような操作可能なものであれば、本物のスパイとして活躍することができたかもしれない。スパイの嫌疑をうけた者や、死にたくもないのに「自決」してしまつた者たちにとつて、日本人という内部の他者は対象化しうるものではなかつたことを忘れさせる。時間をさかのぼつて内部の他者を積極的に見出し外部に投影し、「沖繩人」という「全体」のもとで和解させる——ここに見られるのは「兄弟殺し」の変種である。

「沖繩人」を「日本人」と対立する主体として設定するのでなく、一切の「人種分類」を否定し、沖繩戦の死者を戦争一般の犠牲者として想起するなら、「日本人であることも忘れ」た記憶は、「人種」という虚構の枠組みにとらわれた忌まわしい記憶として行き場をなくす。この場合も、「日本人であることも忘れ」た記憶を誤つた過去の記憶とするという点では、「沖繩人」対「日本人」の図式で沖繩戦を想起するのと同じ結果に至る。

また沖繩戦から「人種分類」を取り払うと、次に現われるのは、「戦争という極限状態」という、人間が人間でなくなる戦場の表象であり、それによつて「日常の陳腐な

情景と戦場は切斷され(富山一九九五・一二九)る。「戦争という極限状態」を平和な状態と対置し過去に追いやることで、沖縄戦の記憶は、現在あるいは未来における平和の想像を可能にするような歴史になる。二度と戦争を起こさないという進歩主義的な文脈で、沖縄戦は想起されるのである。

たとえば「沖縄国際平和創造の杜」の基本理念は、「悲惨な沖縄戦の歴史的体験は、新生沖縄の原点であったことを再確認しつつ、広く人類愛に立ち、国籍を問わず、軍人・非軍人の別なく、すべての戦没者に追悼の意を表すとともに、世界の恒久平和を祈念する」、そして「平和とは、単に戦争のない状態をいうのではない。貧困、飢餓、差別、暴力、人権抑圧、環境破壊などもまた平和を脅かすものである。このような克服すべき諸問題の解決を目指す積極的平和に立脚して、県民総意の下、主体的かつ積極的に平和の創造にかかわり、平和の発信地としての拠点形成を図る」(石原、新垣一九九六・一三七)とうたっている。この壮大な想像力もまた、形式的には提喻的であることに注目したい。死者は人類という全体を経由して想起される。また「すべての戦没者」を追悼するということは、戦没者以外の死者は対象外であることを意味する。たとえば、老衰による死者は、「沖縄国際平和創造の杜」の追悼の対象とはおそらく

ならないだろう。彼らは平和の死者なのだから。こうして「全人類」は戦争をする(した)人類と、平和を守る人類とに分類される。

その「沖縄国際平和創造の杜」の一部として、一九九五年、糸満市・平和祈念公園内に除幕された「平和の礎」は奇妙な記念碑である。国籍や軍人・非軍人を問わず、沖縄戦のすべての戦没者の名前が記されているからだけではない<sup>⑤</sup>。具体的な個人名が刻印されているにもかかわらず、アンダーソンのいう「無名戦士の墓」(アンダーソン一九九七・三二)と似ている。というのも「平和の礎」は、「戦没者」という限定され全体化された死者を、全人類という上位の「全体」を経由して想起させるものであり、個々の死者はそれ自体として想起される必要がないからである。死者は「われわれ人類の平和のための犠牲者」として想起される。だからこそ、だれもが訪れ哀悼することのできる記念碑でありえるのである。主体がネイションではなくても、そこには「鬼気せる国民的想像力」(アンダーソン一九九七・三二)と同じ形式の想像力Ⅱ提喻的想像力を認めることができる。

たしかに「平和の礎」は「無名戦士の墓」と違って、個人名の記載という「奇妙な、近代的冒瀆!」(アンダーソン一九九七・三二)を犯してはいるが、むしろ「その固有名

記憶の「生々しさ」について（磯田）

詞をみたひとが、具体的個人に思いを馳せることによって、大量死という数字のもつ重みをより鮮明にしていくなかで、う（石原、新垣一九九六…一四四）と期待されている。「具体的個人」を通して「大量死という数字の重み」へ。ここで重視されているのは「大量死」であって、「具体的個人」ではない。「平和の礎」を訪れる人は、仮にそこに記された個人をだれ一人知らなかったとしても、彼ら／彼女らが「平和のための犠牲者」であることを知っており、それで十分なのである。そしてふたたび、沖縄戦は「兄弟殺し」として記憶される——日本国民という兄弟どうしの殺しあいではなく、人類という兄弟どうしの。

日本人と沖縄人は「兄弟」ではない、あるいは日本人と沖縄人だけが「兄弟」ではないとして沖縄戦を想起しても、それが変形された「兄弟殺し」になっているのは、想起の形式がいずれも提喻的だからである。沖縄を日本という全体の部分にする。沖縄を世界の部分にする。戦争するものと戦争させられるものとに分ける。死者と生者はこうした分類のもとで出会う。分類とは「全体」と「部分」の関係において成立し、「全体」と「部分」の関係は一挙に与えられる。また、「部分」どうしは「全体」を経由しなければ結び付かない。

提喻的想像において忘却の危機にさらされていると考え

られているのは、語られていない「部分」と、「全体」を想定することで必然的に生じる余白である。語られていない「部分」は語られ、余白は「全体」を拡大して取り込み、忘却の危機は回避されるかのように見える。しかしこれらの空白が埋められたとしても、それはあらたな空白を見出すきっかけにすぎない。語り続けることは、忘却の危機を発見することでもある。

証言に関わる事実確認的言説は、危機を埋めるべき空間に置き換えていく遂行的役割をもつことになる。その結果沈黙は、症状を訴えたいがまだ訴えることができない状態として設定され、新たに発見された事実によって代弁されていく。つまり患者の沈黙にふみこんでいつて発見される新たな症状は、医療放棄という危機をまだ発見されていない病巣にかえ、こうした未知の病巣は、さらに新たな病状により埋められていく。こうして危機は不断に回避され、医療という秩序は保たれることになる。（富山二〇〇〇…一九一—二〇）

「秩序」すなわち全体化され体系化された知の集合体を守るためにこそ、発見されるべき忘却が存在する。提喻的想像力は饒舌である。語れば語るほど生まれる「危機」を、

「全体」と「部分」を入れ替えながら埋めていく。忘れられた記憶を見出しながら、危機に忘却に抗して語り続ける。饒舌に語り続けるために、語りえないことなどないかのように見えるのだが、この語りえなさの否定こそ、提喻的想像力が饒舌さの代わりに払う代償である。たとえば、岡真理は、ステイヴン・スピルバーグ監督による映画『プライベート・ライアン』を次のように批判する。

スピルバーグの描く戦場シーンは、言葉で説明できるもの、炸裂する砲弾、四肢をもぎとられる兵士、舞い上がる粉塵……等々、再現できるものしか再現されてはいない。説明できない出来事、抑圧された記憶は、登場しない。あたかも、そのようなものは存在しないかのよう。出来事の現実△リアリティ△とは、まさにリアルに再現される△現実△からこぼれおちるところにあるのではないか、という問いはスピルバーグには存在しない。彼が、迫真のリアリズムでもって戦場を再現できるのは、彼において、そのような問いが存在しないから、ではないだろうか。(岡二〇〇〇・二七)

こう言って彼女が問題にしているのはリアリズムが△リアリティ△を隠していることである。このリアリズムは、

史苑 (第六一巻二号)

戦場の細部に至るまで、あたかも本物であるかのように描く。そのようなリアリズムを必要としているのは、映画監督としてのスピルバーグだけではない。「リアリズムの欲望とは、言葉では説明できない△出来事△、それゆえ再現不能な△現実△、△出来事△の余剰、『他者』の存在の否認と結び付いている」(岡二〇〇〇・二九)。したがって、「そのような物語を欲しているのは私たち、△出来事△の外部にいる者たちである。(中略)それはむしろ、その記憶を積極的に抑圧する装置なのだ」(岡二〇〇〇・四三)。リアリズムは、われわれが△出来事△の外部にすることを可能にくれるのである。迫真のリアリズムが目を覆うような戦場の惨劇を再現し、その表象が出来事そのものを閉じ込めてくれる。全体化された△出来事△の表象を享受することが出来事の体験の代わりになる。そして戦争の死者は△出来事△の内部にとどめおかれる。

そして、提喻的想像力で語ることは、死者と生者をひとつの「全体」(しばしばネイション)の下に統合するばかりでなく、聞き手と語り手とを均質な空間に位置付ける。「すべての個々の国民が多くのことを共有しており、そしてまた、多くのことをおたがいすっかり忘れてしまっている」のが「国民」の要件だからである。そのヒエラルキーの頂点にいるのがもはや語ることはない死者であり、「全体」が

#### 記憶の「生々しさ」について（磯田）

死者の代理を務める。これが提喩的想像力の想像する共同体——空虚でありかつ意味が充填された共同体——である。共同体の規模がどのようなものであろうとも、この想像の仕方は変わらない。死者はもいたところから切り離されて、この新しい共同体に再度位置付けられる。

この提喩的均質空間において、死者の名前は「全体」と関連づけられることによって意味を獲得する。ここでは「全体」を経由することなしには死者を想起することができない。虐殺のときが想起する現在にどれほど近くても（あるいはそこから遠くても）、個々の死者を「全体」と交換可能にする提喩的想像力によれば、安心な「兄弟殺し」として想起することができる。「全体」に属するものにとつて記憶は「生々し」くない。

#### 四 「安心できない兄弟殺し」へ

これまで見たように、提喩的想像力にとつての忘却とは、「全体」の内部の空白、「全体」の外部の余白あるいは別の「全体」と共有しない部分のことである。沖縄戦に關していえば、生き残ったものが自身の体験を語るのは非常な苦痛をともなう作業であり、長いあいだ語られずにおかれた体験は少なくなかった。沖縄戦から二〇数年たつてもそうだった。

た。

「わたくしに戦争の話をさせると、狂人になって、あなた方に乱暴を働く結果も生じる惧れがあります」と言つて座談会の出席を拒絶した婦人があつた。多分、夫や子供が砲火に惨殺されるのを目前に見ている時点で心が立ち戻つて、その結果、誰にということもなく腹立たしくなつて、はては狂人同様に理性を失つて、手当り次第目の前の物でも投げつけずにはいられない、といった氣持に囚われるようになる、ということであらう。（宮城一九八九「一九七二」…九）

座談会に出席しないこの女性の記憶が語られることはない。また語ることを拒否したのは彼女だけではない。「あまりにむごく、あまりに生々ましい体験（中略）とうとうそれを胸の奥深く二六時（ママ）ちゆうかくし持つていて、最後は墓場に持つていく人も多いのであらう」（宮城一九八九「一九七二」…九）。本当は体験を「墓場」まで持つていつてもらつては困るのだが、語られない記憶が「全体」にとつてどのような意味を持つかを理解することはできる。戦争体験は悲惨で語るに耐えないのだと内面を読み込むことで、出席拒否が戦争の一部として語られるのである。空白は、

戦争体験という「全体」の一部として意味を持つ。「全体」と関連づけられていれば、個々の「部分」の具体性は語られなくても忘却とはみなされない。空白の代わりに「全体」が語るからだ。

しかしここにはもうひとつの想像力が働いている。沖縄戦の体験は、記憶の一部分から切り出して語る対象にすることができるような距離をとらせない、そのような体験であるのではないかという想像力である。「戦争」という言葉から彼女はなにを思い出しているのだろうか、「夫や子供が砲火に惨殺されるのを目前に見ている時点に心が立ち戻る」とするなら、そのときなにを思い出すだろうか、と考える。銃声、着弾音、火薬のにおい、人の焼けるにおい、家屋の焼け跡、叫び声、怒鳴り声、家族との思い出、自身自身の記憶——これらのすべてが的外れな想像かもしれない。しかし、これは違った形式の想像力——特定の体験のある出来事の一部としてではなく、それを中心として広がる連鎖を想起させる換喩的想像力の働きによるものである。この場合空白は、数多く存在する戦争体験の一部ではなく、戦争体験そのものになる。

これらふたつの想像力は、語られた記憶においても同様に存在している。安里要江が『沖縄県史』で語った戦争体験の記録（琉球政府一九八九「一九七二」…一七四—一九五）

史苑（第六一卷二号）

は、「きわめて詳細かつリアルで、沖縄戦で住民がどのような被害・犠牲を強いられたか、その実態が象徴的に語られているため、沖縄戦学習の最適の資料として早くから注目されて」（梅田一九九九・二二五）いた。安里は、『沖縄県史』で証言して以来、幾度かテレビに出演し、講演会に招かれるなど、「平和の語りべ」として精力的に活動している。安里の語りが「沖縄戦学習の最適の資料」とされるのは、それが具体的であり、そしてより重要なことに、沖縄戦に巻き込まれた住民の体験の典型例だからである。それはたとえば「家族のなかからたくさん犠牲者を出し、沖縄戦の特徴の一つである住民被災の実態がよく示されていること」（梅田一九九九・二二六）である。このような評価は、安里の体験を概念化、つまり死者を「住民」として分類し、数に変換することで可能になる。しかし、安里の失った家族縁者は、単に一人という人数であるのではなく、それぞれが特定の連鎖を生み出す固有のものとして記憶されるべきものである。収容所でアメリカ兵による婦女暴行事件が頻発していた頃、母親を気づかって四歳の子供が吐いた人種的言辞——「母ちゃん、黒ン坊がいけないかね、黒ン坊がいけないかね」は、安里にとって「死ぬまぎわまで母親のことを案じていた」おさない息子の「今でも耳に残って」いる言葉（安里、大城一九九九・一六六）であって、人種差



記憶の「生々しさ」について（磯田）

別とは別の状況に埋め込まれた記憶である。現在「平和の語りべ」として活動している安里が（平和を祈念するのに人種はむしろ障害になるはずなのに）、死んだ息子Ⅱ宣秀の「黒ン坊」という人種分類を否定できないのは、それが安里から宣秀につながりさらに広がっていく特定の連鎖の要素だからである。「黒ン坊」が宣秀の代理になるわけでもなければ、宣秀が「黒ン坊」という言葉に還元されるわけでもなく、それぞれが固有性を失わないまま結び付く。

したがって、こうした記憶は特定の状況に埋め込まれたものであつて、それだけを切り離して全体化された別の文脈に移し変えられると、固有性が失われてしまう。提喻的想像力では体験が埋め込まれた文脈（岡の言う出来事）はかぎりなく軽視されるが、それは忘却とはみなされない。極限状況においても母親を気づかう子供の愛情としてすでに語られているからである。一方、換喩的想像における忘却とは、死ぬまぎらわまで母親を心配した子供、彼の発した「黒ン坊」という言葉、当時の収容所での風聞、事件、生活環境といった連鎖を忘れることである。この連鎖がどのような方向性をもっているかは決定できない。婦女暴行事件にかかわるものであるかもしれず、宣秀の死因となったのかもしれない顔の傷（安里、大城一九九一・一六六）、その傷をつけた砲弾の破片とともに受けて死んだ安里の母、そ

の母を宣秀が「ピッピーおばあ」と呼んでいたこと（安里、大城一九九一・一三一）、神経のこまやかな宣秀と対照的にのんびりした性格であつた甥の宣安（安里、大城一九九一・一六六）という方向に進むかもしれない。むしろ、方向の非決定性は換喩的想像力の特徴といえるだろう。宣秀は、安里の息子でもあり、「ピッピーおばあ」の孫でもあり、宣安の従兄弟でもあり、若い母親に「黒ン坊」という危機が迫っていることを理解する子供でもあるというように、重層的な存在であり、さらに、そのどのレベルも宣秀のすべてを特権的に決定するものではないために、記憶が紡ぎだされる方向は決まらないのである。付け加えれば、それらのレベルは、個別にあるものがひとつにまとまってできるのではなく、最初からひとつの不可分な束として存在する。つまり、母と子、祖母と孫、従兄弟といった個別の関係が先立つてあり、それらが集まって宣秀という存在を形作るのではない。宣秀は、安里の息子、「ピッピーおばあ」の孫、宣安の従兄弟といった固有の隣接関係の束として想起されるのである。

また、提喻的想像では、出来事自体とその想起とがともに「全体」に一挙に結び付けられることによって、記憶がいわば無時間化されている。全体化された出来事とそれを語るべき「全体」はぴったりと重なっており、この提喻

空間では、出来事はいつだれがどこで語っても同じ意味をもつ。沖縄人の沖縄戦、日本人の沖縄戦、人類の沖縄戦、軍人の沖縄戦、住民の沖縄戦……の「の」の前が「全体」でその後が出来事である。「全体」は入れ子構造になっているので、たとえば、沖縄の住民の女性のエリートエリートの沖縄戦でも同じ提喻的構造になる。「全体」を分類する基準は国籍や階級やジェンダーとは限らず、均質化され区切られた時間でもある。沖縄の再統合の前と後、新事実が発見される前と後など、いずれにしても、全体化された出来事が再配置される文脈もまた全体化されたものである。(したがってこの場合、いつだれがどこで、という問いは、語りが「全体」のどこに位置するか、どの部分を占めるか——それにどれくらいの権威があるか——という問いではない。)

しかし、換喻的想像においては事情はまったく異なる。想起される出来事と想起する場とは、ズレたままである。死んだ子供を中心に広がる記憶の連鎖は全体化されることなく、想起する現在という場——たとえば平和集会が平和を語る場というレベルではなく、その行なわれる場所、そこにいたる道、会場で会った人、その日の天気などのレベルにおいて想像されるような、全体化されない連鎖——に再配置される。たとえばこの章の冒頭に引用した例のように、自分の体験をすでに終わった戦争の一部として思い

出すことができない女性が、想起の場として与えられた死の匂いのしない座談会で「狂人」になるかもしれないと予感するのは、たとえ未来の平和のためとはいえ、記憶と記憶を再配置する場とのズレを無視することができなかった事例といえるだろう。記憶の紡ぎだす無限の連鎖と、戦争体験を語るという全体化された場とはいかにも不釣り合いだったのだ。もちろん、語ることができたとしてもこの不釣り合いが解消されるわけではない。だがこれだけなら、個人の記憶は「国民史」(ここでは全体化された平和祈念共同体という、ネイションならざる「ネイション」まで考慮に入れていたが)と別に存在するという、あたりまえのことを確認したにすぎない。重要なのはこの先、個人的な記憶が個人にとどまらず、また記憶の固有性を失わず、社会的なものになるプロセスを見ることである。

知花昌一は一九四八年生まれなので、戦場での体験はない。しかし彼がしばしば反基地闘争を普通のことと主張する(知花一九八八……一、一九九六……三)のは、戦場の記憶が知花の日常の構成要素になっていて、日常の延長線上で反基地闘争が想像できるからである。知花の「日常」は、自己を中心としたさまざまな関係の網の目から構成されている。中学生の頃まで「アメリカ兵は遊び相手のようなものだった」(知花一九八八……七八)。「近所のハーニーさん」

記憶の「生々しさ」について（磯田）

は腹をすかせた知花たちにアメリカ軍の食料を分けてくれた（知花一九八八・七二）。降下訓練をしている兵士のパラシュートをたんで小銭を稼ぎ、「買い食いをしたり、石油を買ってタイマツをつくりガマで遊んだ」（知花一九八八・七四）。「ミサイルが発射されると、ドーンと地なりのような響きと共に窓ガラスがビリビリとふるえ、私たちは教室の外に飛びだしたものだ。た。た。（中略）噴射煙が渦を巻くように残り、ミサイルは海のかなたに飛んでいく。私たちはそれを無心に喜んで見ていた」（知花一九八八・七五）。読谷高校では教師が「復帰運動」と基地について語り、知花は、基地があたりまえにあると思っていた「そういう自分の考えは間違っていたんだなあ」（知花一九八八・七八）と考へはじめた。「復帰運動」では日の丸を振ったが、その後日の丸や君が代は「戦争につながる」と訴えてきた。そのことが母校の女子高校生が卒業式会場で日の丸を引きずり降ろしてドブに捨てる行為につながったと感じ、それなら自分も、と弘瀬勝・日本ソフトボール協会会長が強制する日の丸掲揚に反対した（知花一九八八・二五・二七）。強制収用された「象のオリ」（楚辺通信所）の以前の所有者であった叔父（知花一九九六・五）、基地に葉莢を拾いに立ち入って撃ち殺された義理の叔父（知花一九九六・四）、障害のあった娘を守るため竹やりをもってアメリカ軍にひとり立ち向

かい殺された祖父といった、縁者の記憶（知花一九九六・五）、アメリカ兵の暴行を未然に防ぐために組織された自警団、それにもかかわらず強姦され村から出ていった女性たちの記憶（知花一九九六・七）。八七人が「自決」したチビチリガマは彼の住む読谷村・波平にある。東京からきた絵本作家の下嶋哲朗は知花に協力を求め、三八年間沈黙し続けたガマの生き残りからの聞き取りを実現した（下嶋一九八四）。知花が通学していた頃読谷高校の教師だった山内徳信はその後読谷村村長になり、不発弾処理場をとりもどして寮を、F四戦闘機の射撃場跡に公園とレストランをつくった（知花一九八八・一〇四）。日の丸焼却の舞台になったソフトボール球場は、山内村政のもとアメリカ軍の飛行場内に建設されたものだ（知花一九八八・一〇九）。

知花はこうした日常の延長線上で反基地闘争を行なう。「日の丸」を焼き捨てたのは、母校の女子生徒の行動がきっかけになっていた。だがその結果が日常的でなかったのは言うまでもない。「天誅を下す」といって右翼団体がチビチリガマの像を破壊し、知花の経営するスパーマーケットに放火し、街頭宣伝車でやってきては「非国民」と罵声を浴びせかける。だが知花は、献血し、輸血されれば「非国民がふえる」と喜んだ（知花一九八八・二）。「象のオリ」へ地主として「当然の権利として」入って「歌を歌ったり踊っ

たり（知花一九九六・四）した。日本／沖縄、戦争／平和、基地の肯定／否定といった二分法に基づく抵抗とあわせて、こうした換喩的抵抗を行なうのが、知花の反基地闘争のひとつの特徴といえる。献血・輸血は血液型によって行なわれるものであって（だれの血かとは問われない）ナシヨナリズムと本来関係ないのだが、そこに血の換喩的論理を持ち込む。土地を取り戻す手続きとは関係なく、歌い踊る場所を「基地内」にまで拡大する。知花は戦争体験を全体化し、それに同一化するのではなく、家族縁者やチビチリガマの生き残りから聞いた戦争体験の記憶をズラしながら、その延長で反基地闘争を行なうのである。

実際、日の丸焼却はさまざまな反応を生んだ。右翼はもちろん知花を殺すと言った。日の丸焼却は村の財産の器物損壊だからと、知花は山内に自分を告訴するよう求めた（知花一九八八・四六・四七）。ふたりの関係は、反基地の同盟関係でもあり、また村長／村民の関係でもあり、どちらか一方に還元されるものではない。村長として知花を告訴した山内は「ショイイチ君はわれわれの気持ちを代弁してくれた」と言った（フィールド一九九四・一一八）。右翼が知花の「はんざスーパ」に押し寄せ、客に買わないよう圧力をかけても、「近所のオバー」たちは知花の店から商品を買いつけた（知花一九八八・五一）。市場における購買はそ

の場限りの行為のはずだが、「近所のオバー」たちにとって「はんざスーパ」は波平の情報交換の場でもあり、日の丸を焼いた男（彼女たちにとっては普段顔を付き合わせる相手だ）の経営する店というのはその一側面に過ぎない（右翼の妨害を受けながら買いつけるのは「いつも通り」のことではないが）。チビチリガマの生き残り、与儀トシは「もしほんとに平和の象徴なら、そして世界中の人もそう思ってくれるのなら、あの旗でもかまわないけどねえ（フィールド一九九四・一二四）。右翼団体は、旗の焼却への報復としてチビチリガマの像を破壊したのだが、遺族会の会長・比嘉平信は「読谷は可能な限り抵抗したのだから、あそこで折れるべきだった」つまり焼くのはいきすぎだと考えていた（フィールド一九九四・一二二）。実際、像が破壊されたことで、遺族と知花一家との関係は一時こじれ、緩やかに回復していった（フィールド一九九四・九一・九三）。知花の父親は日の丸を焼いたのはよくないといい、「ショイイチをぜつたい赦さない」「今後いつさい力を貸さないぞ」と告げたのだが、「でも本が出たら、オジーチャンはまっさきに読んだんですよ（フィールド一九九四・一一一）。知花の妻ヨコは「それをするのがどうしてオトーサンでなくちゃいけないかったのか、とは思いましたよ。でも悪いことだとは思いません」（フィールド一九九四・一一一）。母親は「旗

記憶の「生々しさ」について（磯田）

を焼いたりさえしなければねえ。でもわかつているんです、そのおかげで運動が全国にひろがったってことは」といながら複雑だ。「あの子を大学になんかやるんじゃないの（中略）なにも悪いことなんかしていないのに」（フィールド一九九四・一一二）。

母親の言うように、日の丸を焼却したことで、知花は人気のあるスーパーマーケットの経営者から、反基地あるいは反日の丸・君が代の英雄として一躍全国に知られる存在になった。本論での言い方では、それまでの換喩空間から、沖縄戦・反基地・反安保・平和運動が一体になった提喩空間へ躍り出たということになる。そして提喩空間では換喩的記憶は切斷される。

前章で論じたように、提喩的想像力で沖縄戦を想起した場合、日本／沖縄、戦争／平和という二分法において死者を想起することになる。『』の前後は切斷され、死者とは、日本の死者か沖縄の死者か、戦争の死者か平和の死者か、という二者択一が求められる。チビチリガマで死んだ人たちは、国家の犠牲者（戦争になればまた犠牲を求められる）か、戦争の犠牲者（二度と戦争に巻き込まれないことを願う）かに分類される。チビチリガマで死んだこと自体はあまり重要ではなくなる。この点では、「はんざスーパー」に放火し、チビチリガマの像を破壊した右翼団体と、平和運

動家としての知花に共感する人々とは、沖縄戦の死者を同じ図式で想起していると言える。琉球大学教授・米須興文が「よく本土マスコミにとりあげられる知花昌一さんの行動も、沖縄人の典型的な行動というわけではないのです。知花さんの姿に感応する沖縄人は少ないでしょう。あのような抽象的な行動は、沖縄人の胸には響かない」（与那原一九九七・一四八）と言うのは、提喩空間における知花の困難を的確に言いあらわしている。戦争／平和の二分法のもとで「運動が全国に広が」り「よく本土マスコミにとりあげられる」平和運動家の一員に加えられたが、基地問題という「全体」を経由しなければ届かないような「抽象的な行動は沖縄人の胸には響かない」。しかし右翼団体の胸には響いた。日の丸Ⅱ天皇制Ⅱ戦争／反日の丸Ⅱ反天皇制Ⅱ平和の図式によって、敵と名指しされたからである。知花が単純に反日の丸の立場に立っているのではないことは第二章で触れたが、日の丸焼却によって出現した提喩空間ではそのような多義性は矛盾でしかない。

しかし換喩的に想起される死者は多義的である。死者は日本人でもあり沖縄人でもあり、戦争もしたし平和も好きだ。そこでは日本／沖縄、戦争／平和のあいだの『』は対立しながら結合している両面価値性を示す記号になっている。日本人になろうとすることは沖縄人が差別されてい

ることと同じことだった。戦争に協力することは平和に暮らすことと同じことだった。日の丸はアメリカの占領からの解放のシンボルでもあり、日本の支配のシンボルでもある。知花を中心とした関係の網の目において、二重性の記憶と戦時中の記憶は、全体化されることなくズレを生じさせながら人々のあいだを受けわたされていく。ふたつの異なった想像空間における日の丸焼却の意味を、フィールドは次のように指摘する。

たしかに、反体制的行為に遠くから拍手を送るのはやさしい。自分の日常生活がずたずたに破れる心配はないのだから。しかしショイイチの行為へのこの異なる評価には、沖縄／琉球史のたどった特殊な歩みも反映されている。いま老年期をむかえた世代の沖縄人は、本土人に劣らぬほんものの日本人たることを証明しようと、おのれの身体も土地も、日の丸の大義にささげた。だが裏切られた——いまの彼らはそうは認めたがらないが。(フィールド一九九四…六四)

知花の行為に対する「遠くから」の肯定的な評価と読谷での両面価値的な反応との違いは、空間の遠近によるのではなく、知花（と沖縄戦の死者）を換喩空間で想像するか

提喩空間で想像するかの違いによる。フィールドの言う「沖縄／琉球史のたどった特殊な歩み」の「反映」とは、日本への奉仕と裏切りという二重性の記憶が、日の丸焼却に対する両面価値的な態度として反復されていることと言いつ換えることができるだろう。読谷の換喩空間では、信頼と疑念というふたつの異なった態度を表裏一体にする関係が、別の要素の組み合わせによって保たれている。リゾートは新しい基地だという読谷的レトリックがある（フィールド一九九四・九三）。本土資本によるリゾートホテルとアメリカ軍基地は、ともに住民の立ち入り禁止区域であり昭和天皇が死んだとき旗を掲げたため、このようなレトリックが用いられるのだが、この隠喩的表現は、戦争協力／集団自決、復帰／安保、日の丸の容認／日の丸の否認、基地のもたらす恩恵／災い、ホテルの経済効果／自然破壊といった二項対立群が類似性によって結合されたとき、読谷という場に一瞬浮かび上がる不確かな同一性を表わしている（読谷から離れば無意味になるか、提喩的に分断・統合されてホテルⅡ基地Ⅱ日の丸Ⅱ日本／反ホテルⅡ反基地Ⅱ反日の丸Ⅱ反日という二分法が、沖縄戦の死者を英霊か犠牲者かと問うことに直結するかである）。図式的にいえば、想起される過去の換喩的連鎖と想起する現在の換喩的連鎖とが、そのつど類似性によって結び付けられるというのが、換喩

# 記憶の「生々しさ」について（磯田）

空間における記憶のあり方なのである。

たしかに提喻空間においても換喻空間においても、事実  
は単に事実として再現されるのではなく、想起される時点  
の状況によって再構成される。しかしここで重要なのは、  
記憶が現在の状況によって変わるということではなくて、  
変えられ方が違っているということである。提喻空間では  
事実は出来事から切り離されて全体の一部に回収され、換  
喻空間では過去と現在それぞれの換喻的連鎖の類似性によっ  
て事実は新たな連鎖の構成要素になる。このふたつの空間  
は、別々に存在するが無関係に存在するのではない。提喻  
空間において換喻空間は過去の換喻的連鎖から切り離され  
て「全体」の一部として位置付けられ、一方換喻空間では  
提喻的体系は別の連鎖の構成要素になる。ネイションのパ  
ラドクスはここからはじまる。

ソフトボール協会の弘瀬会長がネイションにあたえた内  
実Ⅱ日の丸は、生々しい記憶を凶らずもつなぎ止めてしまっ  
た。競技会場があるのが読谷でなければ、日の丸はひき降  
ろされも焼き捨てられもしなかったかもしれない。弘瀬が  
日の丸を掲揚しろと言いださなければ、遺族がいやがるの  
にチビチリガマへの「参拝」を強行しなければ（彼はチビ  
チリガマを摩文仁の慰霊碑のようなものだと思っただけの  
かもしれない）（知花一九八八・一六二〇）、知花昌一とい

うスーパーマーケット経営者が山内村長の抵抗を（断わり  
もなく）受け継いで旗を焼いたりしなかったかもしれない  
（知花一九八八・二五）。知花がいなければ、知花たちの反  
日の丸・君が代の訴えに読谷高校の生徒が耳を傾けなけれ  
ば、知花がチビチリガマの生き残り顔見知りでなければ、  
下嶋哲朗が知花を焼き付けてチビチリガマの調査をはじめ  
なければ（下嶋一九八四・八〇）、下嶋が当山ウトに会わな  
ければ（下嶋一九八四・二二）、当山がチビチリガマに逃げ  
込まなかったら、当山が生き残らなければ……。この連鎖の  
先にはガマで起きた「兄弟殺し」の記憶がある。しかしこ  
の「兄弟殺し」は安心を与えない。全体化された者どうし  
の殺しあいではないので、提喻的構造に回収されないから  
である。

この「安心できない兄弟殺し」の記憶は、死者を中心と  
し、死者に固有な無限の連鎖として想像され、現在の連鎖  
との類似性において想起される。ガマのなかで殺した者と  
殺された者との関係はすでに終わったものではない。比嘉平  
信は復員後両親を問い詰めるようにして親戚一五人の死を  
知ったが、その状況を知ったのはそれから三八年後——下  
嶋らによってチビチリガマの「集団自決」の調査がおこな  
われてから——のことだった（フィールド一九九四・一二  
一）。看護婦をしていた比嘉の従妹・ユキは毒薬を注射して

彼らの自決を手伝い自らも自殺した(下嶋一九八四・五一・五二)。ユキのふたりの弟は、前線から生還した後アルコール中毒になるまで酒を飲んだ挙句、家売り払って村から出ていった(下嶋一九八四・五三)。帰還兵が死者の記憶をあらたな連鎖につなぎ止める事例は少なくない(たとえば下嶋一九八四・一五〇・一五一、一七九)。だが親しいものを失ったからというだけではなく、殺した者と殺された者との関係がひとつの基準で決定されるものではなく、ある基準が持ち出されれば同時に別の基準が持ち出されたとしても、どれもが決定力を欠くような関係の束として規定され、そのような重層的な関係を現在の換喩的連鎖が類似性において引き受けるために、この「兄弟殺し」の記憶は安心を与えないのである。

日の丸が焼かれなければチビチリガマの像は破壊されなかった。犠牲者が「二度殺される」ような苦痛を与えられることもなかった(知花一九八八・五五)。だからといって、単純に知花を憎むこともできない。実際に像をこわしたのは右翼団体なのだ。日の丸を焼くことの意味は読谷ですら「胸に響かない」かもしれないが、日の丸を焼くという行為は読谷の日常に新たな換喩的連鎖を付け加えた。この換喩的連鎖は、そのきつかけを作った当人でさえどこにつながるか予測しにくい。知花は、反発は予想しても右翼団体が

自分の店に火をつけるとまでは考えていなかった(知花一九八八・四八)。弘瀬やソフトボール選手たちは、日の丸が焼かれるとは予想していなかっただろうし、慰霊にきたつもりが遺族から強く反発されるのも思っていなかっただろう(知花一九八八・一九一・二〇)。換喩的連鎖は予測しにくいものであるというより、むしろ想起する人の意図とは無関係に形成されていくものだと言ったほうが正しい。日の丸焼却は知花の意図的な行為だが、その連鎖は意図的ではないものを多く生み出した。それだけでなく、知花自身を中心とした、意図的でないさまざまな関係のなかで生みだされたものでもある。たとえば「いまでもトンボ(アメリカ軍の偵察機…引用者)がくるかと思うて、ああして見張りをしている」老人(真尾一九八六・一九)、かつて天皇の写真を抱かえて逃げ惑い、「いまでも飛行機の爆音を聞くと、ところかまわず物蔭に身を伏せてふるえる」元小学校校長(真尾一九八六・五三)、若い女の腹からあふれ出た内臓、「あの色を思い出すと、いまでも食事がのどを通らなくなります」という女性(真尾一九八六・六九)と同様に、知花は日の丸掲揚によって自己の経験した出来事を思い出させられている(旗を「焼かれた」弘瀬はなにを思い出させられただろうか)。現実の隣接性が記憶の「生々しさ」を表わすのは、そこで想起するものは自分の記憶だが自分で操作す



## 記憶の「生々しさ」について（磯田）

ることができないからである。つまり換喩的想像力においては、首尾一貫した説明原理によって、出来事をそのものとして思い出すことができず、何を記憶し、何を忘却するかを選ぶこともできないが、過去の連鎖と現在の連鎖のあいだにたまさか現われる類似性をつかまえることによって、受動的に経験を想起することができるのである。

## 五 おわりに

沖縄戦の記憶の風化とは、体験者の記憶は何年たっても癒されることがない苦痛をもたらすものであるのに、体験していないものはその悲惨さを忘れてしまうことを指している（たとえば下嶋一九八四・六四）。しかしこのような「風化」の捉え方は、記憶を語るためのふたつの想像力の違いを見落としてしまっている。この「風化」は別個の「全体」<sup>③</sup>がどうしが重ならないか、重なってもそれがごく一部に過ぎないことを意味し、さらに「体験者」という全体化された物語が「非体験者」の物語として共有されなければならぬことを主張しているのである。屋嘉比は、一九九四年現在、沖縄県民の7割が沖縄戦を経験していない者であること、アメリカ軍占領下の沖縄を体験していない「復帰後世代」が戦争体験者の数を上回ったことを挙げ、「沖縄戦の継

承において私たちが無意識に前提としている、体験者が非体験者に沖縄戦を語る構図（中略）に則っていたこれまでの沖縄戦の語り、あるいは語り方そのものが、おのずから変容せざるをえないことを示すものである（屋嘉比一九九四・一三四）と指摘している。だが、この「変容」が、新たな「全体」の発見や「全体」のさらなる細分化を意味すれば、第三章で論じたように、ふたたび「生々しさ」の忘却につながるだろう。<sup>④</sup>

しかし、「風化」に対する危機感があっても、屋嘉比が指摘したように「風化」の問題が体験者から非体験者へという構図そのものの問題であることに對する危機感がどれほど深刻に考えられているだろうか。アメリカ兵による少女暴行事件に端を発し、八五、〇〇〇人が集まった一九九五年一〇月の県民集会と、大田昌秀・沖縄県知事（当時）の代理署名拒否をきっかけにした一九九六年九月の「基地縮小、地位協定見直し」に関する県民投票とは、ともにアメリカ軍基地問題にかかわるだけに、沖縄県人ならば傍観できない出来事のはずだった。しかし与那原は「昨年、いてもたってもいられないような気持ちで県民集会に向かった際の熱気は、この投票に至ってはついに起こらなかった。むしろ、そのために県や運動団体は必死なほどに盛り上げようとし、それがさらに県民の気持ちをひかせてしまった

ようだ(与那原一九九七・一四四)と言う。五九・五三パーセントという低投票率、八九・〇九パーセントの賛成票(全有権者の五三パーセント)という結果は、投票者〓基地反対/棄権者〓基地賛成という構図で説明されがちだが、与那原は、公告・縦覧に関連する一〇市町村のうち八市町村で、投票率は県平均に近いながら反対票が賛成票を上回ったことを揚げ、「基地縮小により直接的な影響を受ける住民が多数いる地域でも棄権によって意思表示をしたわけではない。本当に反対する人は、投票所に赴いて意志を示したのだ」(与那原一九九七・一四三)と指摘している。

しかし与那原が同時に注目しているのは、「基地縮小、地位協定見直し」という「面と向かって異議を唱えることすら困難な『正義のスローガン』」(与那原一九九七・一四四)への賛否を問われて意志を表明しなかった棄権者である。棄権者のうちの少なくとも人々は基地縮小への賛成/反対を表明したのではなく、「沖繩のこころひとつに」を演出するために「正義のスローガン」を揚げ、何を決めるのかさえ不明確な投票を「動員」方式で成功させようとすることへの反対を表明したのである(与那原一九九七・一四四・一四八)。具体性のない「正義のスローガン」を問われたとき、その内容への賛否ではなく、それを掲げることの意味を考えた有権者が少なからずいたということである。棄権者の

ひとりとは「投票すること自体サヨクを応援するみたいでいや」と答えた(与那原一九九七・一五〇)。与那原によれば「サヨク」とは「沖繩を支配する運動感覚」を指すという(与那原一九九七・一五〇)。動員が前面に出た県民投票に対し、県民集会では「組織的に動員された参加者も多かったが、自主的に参加した人も多かった」(与那原一九九七・一四五)。だが「自主的に参加」することの意味を問わず、「県民の不退転の決意を一過性のものに終らせずに、いかに運動を継続させていくか」(与那原一九九七・一四五)を考えた連合沖繩の幹部たちは、基地がもたらすさまざまな問題を想起させることに成功したとはいえないだろう。

第四章で引用した米須教授の知花に対する懐疑的な評価はこの文脈で発せられたのだが、米須は九五年の県民集会について「沖繩人が燃え上がるのは、非常に人間臭い肌の触れ合うような感情的なものです。だから少女の事件であれだけの人が集まったわけです」とも述べている(与那原一九九七・一四八)。強姦された少女と県民投票を呼びかけた人々との違いは、一方が幼い少女という犠牲者で、一方が性別を問われない成年に達した人々であることだけではない。「県や運動団体」は積極的に表舞台に出て「正義のスローガン」という「全体」との関連でしか意味をもたない。しかし、ほとんどだれもが顔も名前も知らない少女は

## 記憶の「生々しさ」について（磯田）

固有性を失っていない。それは単なる「無垢な犠牲者」というイメージの効果ではないのである。たしかにアメリカ兵に強姦された女性を「基地の犠牲者」として語るとき、個々の女性には固有名ではなく、人数や年齢という数字で語られるが、その被害者はひとりひとり別の人なのである。強姦の被害者が匿名であっても、彼女たちを被害者という「全体」の「部分」としてしか語れないわけではない。イメージや統計資料など介さなくても、自分の周囲の別の少女——自分の姉妹、従姉妹、友人、娘、あるいは自分自身——の延長線上で彼女を想起することができる。怒りを爆発させた人々は、たしかに組織的でなく不安定であり、沖縄戦や基地問題について普段から関心を抱いていないかもしれないが、少女と沖縄戦の記憶とが換喩空間のどこかでつながっていることを見失ってはいいない。

「沖縄人が沖縄のことを知る。県民投票はそのことにも意味があったのだでしょう」（与那原一九九七・一五四）、あるいは「沖縄の友人たちは口々に『あの県民投票っていったいなんだったの』と言うが、無駄なことではなかったとも思っているようだ」（与那原一九九七・一五六）と評される県民投票は、政治的效果には疑問が残るが、沖縄の問題をさまざまな記憶の連鎖につなぎ止めることが多少なりともできたとは言えるだろう。提喩的想像力と換喩的想像力とは別

個の原理だが、日常性のレベルで相互行為的な関係を結ぶことができるのである。それがネイションのパラドクスの可能性であり、生々しい記憶が喚起される瞬間でもある。この相互行為性を失った沖縄戦の記憶の一面面を与那原は次のように描いている。

そういえば近年、沖縄では修学旅行生を多く見かける。（中略）嘉手納基地周辺やひめゆり資料館でのガイドの案内に、高校生たちが陰で「ハイハイ、わかりましたよ。で、レポートはどう書けばいいのよ、そこ教えてよ」とつぶやいているのを耳にした。高校生にとっても、沖縄にとっても、戦争という歴史にとっても、じつに不幸な出会いかたを強要されていると思わせるをえない。（与那原二〇〇〇・一七七）

こうした「不幸な出会い」は本土と沖縄や体験者と非体験者とのあいだで起こっているのではない。政治上の力を多く期待できても原理上硬直せざるを得ない提喩空間が、自由ではないが弾性に富んだ換喩空間を見失ったときに起こる。一九九九年八月一三日、「国旗および国歌に関する法律」によって国旗として定められ、いまや時価三、五〇〇円の布切れではなくなった日の丸に、知花はどのような想像をめくらせるだろうか。

注

- (1) 原著一九九ページでは fratricide。frater はラテン語／フランス語で兄弟を意味する。後に引用する富山（一九九五）は「同胞殺し」と翻訳している。
- (2) ノーマ・フィールドは『集団自決』の中立的英訳は "collective suicide"。『集合的自殺』だが、自殺の「自己決定は二重の強制力のもとでなされている」として compulsory group suicide 「強制的集団自殺」と訳すことを主張している。同感だが、ここでは沖縄でも普通に使われる言葉として括弧つきで「集団自決」を用いることにする。
- (3) ここで曾野が依拠しているのは、日本（本土）／沖縄ではなく、軍隊／一般市民という区分である。この二分法は平和祈念の語りとも共通する。違うのは、軍隊の論理を追認するかしないかである。
- (4) 「皇民化教育」の効果を「計測」するのは難しいが、近代日本における沖縄人のプロレタリアート化という観点から沖縄の二重性を分析した富山（一九九〇）の分析は示唆に富む。
- (5) 沖縄県人に限っては、沖縄戦の死者に限定せず、「満州事変」以来の死者を刻銘しており、「沖縄戦という位置づけが曖昧となった」と指摘されている（宮里一九九九）。
- (6) もっと控えめな言い方としては、「確かに、平和の礎で戦死者の膨大さを感じるだけでは沖縄戦を知ったことにはならない。なぜこれだけの戦死者がいるのかという疑問を持ち、自ら答えを探すことが大切だ」（古賀二〇〇〇・二一五）がある。しかしこれも、平和と戦争の二分法を自明のものとして受け入れることからはじまる要求であることにはかわりない。ここでもやはり死者は戦争の死者であって、具体的個人ではない。

ない。

- (7) 体験の取り止めのなさに戸惑いながら語るといことは珍しくない。一例を挙げれば、作家の真尾悦子がつてをたどってインタビューしたある沖縄の女性は、戦場体験を話す途中次のように語った。「言葉についていうのは、焦れたいものですねえ。あつたことを、そのまましゃべろうと思っても、どこか、少うし、違ってしまう。物事を、まったく同じに再現して伝えるってことは、実際は不可能なのかもしれないね。（中略）わたしは、飾らないで、事実通りに話してるつもりなんだけど、ズレがあるような気がしてくる」（真尾一九八六・九〇）。
- また、聞き取りにあたった宮城によれば、安里の最初の証言は「言葉にも前後錯綜したり、『ですね』が多かったり、事件も前後二重映しになったりする」（琉球政府一九八九「一九七一」・一一五九）。宮城はその理由を、時間に余裕がなく気持ち焦ったためとしているが、そう考えることでむしろ安里の体験の語りえなさを見落としてしまっているだろう。この点で、宮城が「生きる力を取り戻す苦しみ、『忘却』を自ら努め、月日の力によって、立ち直られただろうが、それをくわしく活字すると一巻の単行本でなければ収められないのではないかと思う」（琉球政府一九八九「一九七一」・一九五）と締めくくっているのは暗示的である。
- (8) 知花は当初、日の丸をメイン・ポールからひき降ろすだけでおさまらず焼き捨てたことを、「フィリピンでも、韓国でも、日本の侵略に反対して日の丸が焼かれていることの意味」（知花一九八八・三〇）と重ねあわせていた。しかし、後には「そうしないとまただれかが揚げてしまうと思うから」

記憶の「生々しさ」について（磯田）

（フィールド一九九四・六六）と簡単に答えた。知花の日の丸に対する態度はしばしば矛盾しているように見えるが、日の丸を国家の象徴としてみるだけでなく、日の丸が（当時）法的には国旗ではなく三、五〇〇円程度の布切れであることを含めた、現実の存在としての日の丸の重層性を認めているからだろう（検察庁による起訴状では、知花の罪名は建造物侵入、威力業務妨害、器物破損である）。

（9）屋嘉比自身は、沖縄人の被害と加害を、日本と沖縄の関係において捉える興味深い試み（屋嘉比二〇〇〇）をおこなっている。

参考文献

安里要江、大城将保

一九九九『沖縄戦・ある母の記録』高文研

アンダーソン、ベネディクト

一九九七『増補 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行——』NIT出版（Anderson, Benedict 1991

*Imagined Communities : reflections on the origin and spread of nationalism* (Revised Edition), Verso, New York)

石原昌家、新垣尚子

一九九六『戦没者刻銘碑『平和の礎』の機能と役割』南島文化『沖縄国際大学南島文化研究所』一八・一三三―一四八

梅田正己

一九九九『編集者あとがき——第七刷の発行にさいして』『沖縄戦・ある母の記録』高文研

大山朝常

一九九七『沖縄独立宣言——ヤマトは帰るべき「祖国」ではなかった』現代書林

岡真理

二〇〇〇『記憶／物語』岩波書店

小田亮

一九九六『しなやかな野生の知』岩波講座文化人類学「一（思想化される周辺世界）」岩波書店

一九九七『ポストモダン人類学の代価——ブリコロールの戦術と生活の場の人類学』国立民族学博物館研究報告「二一四・八〇七・八七五」

一九九九『ネイションの人種化とセクシュアリティ』『記号学研究』一九（ナショナリズム／グローバリゼーション）・一二九―一四二

金城重明

一九九五『「集団自決」を心に刻んで』高文研

金城実

一九九六『人間の尊厳が何たるかを——チビチリガマの像のことわざが祖霊の島のことわざ』『我肝沖縄——ワチム（わが心の）オキナワ』解放出版社

古賀徳子

二〇〇〇『平和の礎「沖縄を知る事典」（沖縄を知る事典）編集委員会編』日外アソシエーツ

佐藤信夫

一九九二『レトリック感覚』講談社

下嶋哲朗

一九八四『南風（パイヌカジ）の吹く日』童心社

新沖縄フォーラム編集運営会議

一九九九『けーし風』二五号

曾野綾子

一九八四『ある神話の背景』『曾野綾子選集二』第二巻 読

売新聞社

知花昌一

一九八八『焼きすてられた日の丸』新泉社

一九九六『沖縄の地よりー我が愛する『ヤマト』へ』『我

肝沖縄ーワチム(わが心の)オキナワ』解放出版社

富山一郎

一九九〇『近代日本社会と『沖縄人』』日本経済評論社

一九九五『戦場の記憶』社会評論社

二〇〇〇『証言』『現代思想』(二月臨時増刊)二八三・一八・

二一

フィールド、ノーマ

一九九四『天皇の逝く国で』みずす書房

真尾悦子

一九八六『いくさ世を生きて』筑摩書房

宮城聰

一九八九『一九七二』「解題」『沖縄県史九 沖縄戦史一』(琉

球政府編)・一八〇 国書刊行会

宮里千里

一九九九『平和の礎』『オキナワなんでも大事典』(CD-ROM)

ひつじ書房

屋嘉比収

一九九四『特集にあたって』『けーし風』二号・一三・一五

二〇〇〇『ガマが想起する沖縄戦の記憶』『現代思想』二八・

史苑(第六一卷二号)

七・一一四・一二五

与那原恵

一九九七『物語の海、揺れる島』小学館

二〇〇〇『もろびとこそりてー思いの場を歩く』柏書房

琉球政府(編)

一九八九『一九七二』沖縄県史九 沖縄戦史二』国書刊行会

ルナン、エルネスト

一九九七『国民とは何か』『国民とは何か』(ルナンほか著)

河出書房新社

(成城大学大学院博士課程)